秋葉街道案内資料 Ⅲ

「気賀から金指・宮口・鹿島へ」

「気賀から祝田・二軒家・宮口へ」

○秋葉山と秋葉信仰

現在，秋葉山には，山頂近くに「秋葉山本宮秋葉神社」の上社があり，山頂より少し下った杉平に「曹洞宗秋葉山秋葉寺」があって，信仰の山としてその両輪を形作っている。それぞれ発行している縁起には，明治の初めに至る解釈に異なるところがある。

秋葉寺は，「秋葉寺略縁起」によると，行基が秋葉山山頂に聖観世音菩薩を本尊とする大登山霊雲院を創建し，その後，三尺坊大権現の出現により「秋葉山秋葉寺」と改められたという。「秋葉山略縁起」（寛政３年の写し）では，「大登山秋葉寺」となっている。

平安時代から鎌倉時代を通じて発達した修験道の霊場の一つとして，三尺坊により秋葉修験の基礎が据えられ，守護神となったことにより三尺坊の霊験への信仰が高まったと推定される。江戸時代中期以降，三尺坊大権現の火防の神としての信仰が急速に広まり，講の組織が全国的に作られるようになった。そして，お札を受けるために秋葉道者となって代参をした。また，村の辻には秋葉山常夜灯やその鞘堂（龍燈）が建てられるようになった。

明治時代になり，神仏分離政策により秋葉寺は廃寺となり，諸仏や仏具は，一時，本寺である曹洞宗可睡斎（袋井市）に移された。その後可睡斎には秋葉総本殿に三尺坊大権現（本体）が祀られ，また明治１３年に秋葉山秋葉寺が現在地に再興されて三尺坊大権現（分体）が祀られ，それぞれ信仰されている。

秋葉神社は，略縁起によると，秋葉山には往古「火之加具土大神（ほのかぐつちのおおかみ）」を祭神とする「岐陛保神社（きへはのかみのやしろ）」があり，中世には秋葉大権現と称していたが，明治の神仏分離により「秋葉神社」と称するようになったという。さらに昭和２７年「秋葉山本宮秋葉神社」と改称され，火防開運の神として信仰されている。

○秋葉街道

秋葉街道は，江戸時代は「秋葉道」と呼び，幾筋もの道がある。特に代表的なものとしては，関東方面からは，東海道を西に向かい，掛川宿から分岐して，森，三倉，犬居を経て秋葉山を目指す。関西からは，東海道を東に向かい，浜松宿から鹿島を経て秋葉山に向かった。また，御油から姫街道を東に向かう道筋もあった。

本資料の秋葉街道は，姫街道の宿でもある気賀から，金指，横尾，宮口，鹿島に至る道筋と，気賀から祝田，二軒家，野口，宮口，鹿島に至る二つの道筋を案内する。この道は明治時代に盛んになった奥山半僧坊参詣の道「半僧坊道」と多く重なる。

二つの道筋は，どちらが古くからあるかは定かではない。江戸後期の「秋葉山参詣道法図」や「落合川筋近辺略絵図面」（天保２年）には，二軒家を通る道筋の方が描かれており，江戸時代はこれが主な道であったと思われる。

姫街道の御油から気賀までの道筋は，拙著**「姫街道案内資料」**を，また，鹿島から光明山を経て秋葉山に至る道筋の案内は，**「秋葉街道案内資料Ⅱ」**を参照してほしい。

秋葉山常夜灯の鞘堂は，浜北地域では「龍燈」と呼ばれる。本案内資料では，他の地域の秋葉山常夜灯の鞘堂についても，便宜上「龍燈」と表記した。

○秋葉街道の道筋の復元について

本資料の秋葉街道の道筋は，江戸時代の道に最も近いと思われる大日本帝国陸地測量部が明治２３年に測量した二万分の一の地図を基にし，地元の人の話を聞き現在の地図上に復元した。現在の地図は国土地理院の「電子国土ポータル」を活用した。不正確な部分があると思われるが，今後修正したい。

現在は通行不能になったり，消滅したりしている部分があるので，近くの道へ迂回してほしい。

○参考文献

静岡県歴史の道　秋葉街道	静岡県教育委員会
浜松市の石造文化財	浜松市石造文化財調査会
遠州山辺の道を歩く	浜松市
愛称標識の由来	都田地区愛称標識設置委員会
浜松の史跡・続浜松の史跡	浜松市史跡調査顕彰会
天竜川と秋葉街道	神谷昌志
静岡県歴史の道　姫街道	静岡県教育委員会
姫街道を歩く	浜松市
ふるさとよもやま話	細江町農業協同組合
半僧坊道の野仏と道しるべ	東海展望１９７５年１月～９月
宮口物語	宮口まちおこしの会
切り絵で伝える「姫街道の町」	いにしえの町づくりの会
わが町文化誌「都田風土記」	浜松市立都田公民館
秋葉道を行く	東海展望１９８３．１０～
遠州歴史散歩	神谷昌志
浜松歴史散歩	神谷昌志
遠州の寺社・霊場	神谷昌志
浜松市の銅鐸・発見滝峯才四郎谷銅鐸	浜松市博物館
細江町史　史料編一	細江町
浜松市史　史料編二	浜松市
尾野の歴史　神社ものがたり	金刀比羅神社　神社世話人
路傍の神仏と道標	浜松市浜北郷土史部

作　成　　平成２６年４月２０日
浜松市浜北区寺島８１６　　太田隆雄
TEL: 053-587-3063　　Mail: **wbs15437@mail.wbs.ne.jp**

秋葉街道

①「気賀から金指・宮口・鹿島へ」

秋葉街道は，気賀の四つ角から分岐して，金指を通る道筋へと向かう。
気賀の他の案内は，拙著「姫街道案内資料」を参照してほしい。

1　気賀関所冠木門跡・本番所（市指定文化財）

四つ角に「史蹟気賀関跡」の石碑がある。ここに気賀関所の冠木門（東門）があったが，残存していない。この西側のききょうや化粧品店とノズエ時計店の間の路地を入った奥に，本番所の一部（下ノ間・勝手部分）が残っている。嘉永７年大地震で屋根に被害を受け，改修されている。屋根は切り妻風造り，狐格子が見える。

関所は気賀近藤家によって警護され，明治２年まで姫街道の通行者，主に「入り鉄砲」と女性の通行を取り締まった。関所には本番所，向番所，冠木門などの施設があり，周囲には，堀，瓦屋根塀，矢来が廻らされていた。

細江図書館の隣には，関所が再現されている。

気賀関所冠木門（東門）跡

本番所の一部

2　気賀近藤家陣屋跡

気賀小学校と付近一帯は，江戸時代気賀近藤家の陣屋があった。元和５年近藤用可のときから明治になるまで１２代にわたり，３５００石余の旗本として，気賀の領主および気賀関所の管理を勤めた。陣屋は関所の西に設けられた。

現在は陣屋の庭に植えられていたという椎の木が残るのみである。この椎の実はとても大きく，近藤氏が毎年この実を幕府に献上したことから**江戸椎**と呼ばれた。**（市指定天然記念物）**

3　細江神社

明応大地震（１４９８年）で流出した新居の角避比古神社のご神体が赤池の里に流れ着いたが，永正８年（１５１１）にこの地に移され，牛頭天王として祀られたという。明治元年に細江神社と改称された。細江神社社叢の**楠（市指定天然記念物）**には，大木の大きな穴にまつわる大蛇と大こうもりの戦いの伝承がある。

境内には藺草神社など多くの境内社がある。

藺草神社は，近藤縫殿助用随（いぐさ　もちゆき）を祀っている。用随は，宝永大地震（１７０７年）による津波で田畑流失などの壊滅的な被害を受けた農民たちに，塩害に強い藺草の栽培を奨励した。やがて藺草栽培及び畳表の生産は，奥浜名湖地域の主要産業となった。社の右手には，藺草が植えられている。

藺草神社

藺草

②「気賀から祝田・二軒家・宮口へ」

（「宮口から鹿島へ」は，①に記載）

改修前の都田川

1　宝生地蔵

江戸時代の中ごろのものとされる。石仏の光背に**「右　はまゝつへ三里半　左　秋葉山道　宮口へ二里　二俣へ四里」**と刻まれる。

もとは対岸の姫街道と秋葉道との分岐点付近にあったとされる。一時所在不明となっていたが，昭和５３年に発見され，この場所にすえられた。

都田川と井伊谷川が気賀で合流するところから落合川と呼ばれる。江戸時代には，ここは気賀関所の要害川の役割があったため，舟渡しが行われていた。**「落合の渡し」**は通常は渡船１艘で舟渡しを行い，大通行の時は近隣の村々から船を調達していた。明治時代になってここに旧の落合橋が架けられた。

2　刑部城跡

１６世紀初頭，永正年間の斯波氏と今川氏の戦いから記録にある今川方の城。永禄１１年徳川家康の攻撃によって落城。天正年間に廃城。西半分は道路で削られたが，東半分は現存し，堀切，井戸などが残る。北東側の金山神社も曲輪の一部と考えられる。

3　金襴の池伝承

刑部城の北西の道路脇に説明板がある。かつて付近に金襴の蛇が住む大きな池があったという。

家康軍との戦いで刑部城が落城するとき，城主の美しい娘が，敵に捕らわれることを避けて近くの池に入り，金襴の蛇に姿をかえ，池に住んでいるという伝承が残っている。しかし，今はこの池も埋め立てられ残っていない。

4　秋葉山常夜灯

落合の渡しから東へ進んだ秋葉街道沿い南側に建てられている。東面に「秋葉山」，その左面に「村内安全」，右面の建立年月は読み取れない。火袋の回りに木枠が付けられ，中に電灯がひかれている

5　道標

現在ＪＡとぴあ浜松細江支店東側水路脇に建てられている。高さ１．５ｍの自然石で**「左あきは山道」**と大きな堂々とした文字で刻まれている。

もとは落合の渡しの東岸の姫街道と秋葉道との分岐点にあったと思われる。そして旧の落合橋の少し北の天白神社の横に移され，さらに現在の場所に移された。

現在の道標から南へ２００ｍ程の所を「秋葉川」が流れている。戦後に耕地整理をしたときに名が付けられたという。

秋葉街道はかつて蛇行していた都田川跡沿いを通る。そして水源地の建物の北（左手）に進み，石垣のある家の南（右手）の細道を進む。しばらく進むと，一本北側の集落の道沿いに龍燈が見える。